

ローマ字から見えてくるもの

渡辺 慎太郎 (nabesin@m-net.ne.jp)

小淵首相の音韻規則

故小淵前首相の国会答弁をラジオで聞いているとき、ある事実に気がついた。小淵さんは「行う」という単語を、ほぼ例外なく「おこのー」と発音しているのだ。この発音が北関東方言なのかどうか私は知る由もない。しかし地域的か個人的はともかくとして、この発音は音韻規則に完全に則っているのである。

ヒトは、口の中のかたちを舌と唇とで変形することにより、さまざまな母音を発音することができる。とはいえ、母音同士の境界が一意に決まっているわけではなく、その分けかたは言語によって恣意性がある。日本語には5つの母音があるが、これは日本語話者が母音集合を5種類に切り分けて判断していることに他ならない。より細かく切り分ける言語（フランス語など）もあれば、もっと大ざっぱな分けかたをする言語（アラビア語など）もある。

音声学では、模式的な母音三角形を用いている。最も基本的な母音を a、i、u とし、他の母音をそのあいだに並べていく。いま、日本語の例を図1に示そう。a と i とのあいだには e が、a と u とのあいだには o が配置されているはずだ。五十音のアイウエオという順番は、かなりの合理性をもっていることがわかるだろう。

この母音三角形を用いれば、音韻規則が理解しやすい。

たとえば「うまい」という言葉を関東地方では「うめー」と発音する。ローマ字で書くと、

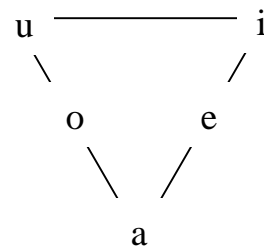


図1 母音三角形

umai が ume となる。ここで母音三角形を見てみよう。ai という2つの母音が、その中間に位置する e に置き換わっていることがわかるはずだ。このような発音の単純化は何も日本にかぎったことではない。たとえばフランス語で ai を e と発音するのは、これと同じことだ。

a-u の部分も同様である。「たまふ (tamau)」を「たもー (tamo)」と発音するのは中世以来のことだ。英語でも、au とつづり o と発音する単語は珍しくない。

もはや「行う」に関してはいうまでもないだろう。ポキャ貧といわれた小淵さんにしても、こうした音韻規則にはきっちりと従っている。もちろん無意識のうちにあるが。

日本語の4原色

ところで、以前から日本語に抽象的な色名が少ないことが気になっていた。日本人は色に敏感だといわれてきたが、日本語自体はそうでもない。桃色、空色、山吹色、黄土色、緑色、紫色、金色、銀色 こういった色は、すべて具

体物からの転用である。

さらに、色名が形容化できるかどうかは抽象性の重要な判定材料となる。そうしてみると、赤・青・黒・白の4色のみが「い」を語尾につけるだけで形容詞となる点で、抽象的な色名と呼ぶことができる。ちなみに紀貫之は『土佐日記』で赤・青・黒・白・黄を合わせた5色を基本色だと見なしているが、「黄」は名詞に修飾する際には「黄なる」と語形変化する点で他の4色とは趣を異にする。

では、これらの4色はどのような対立をなしているだろうか。現代語からいくつか列挙してみると、白黒の対立が多いことがわかる。「白黒テレビ」「目を白黒する」「白黒はつきりつける」などがある。いっぽう、その他の対立も少しはある。「紅白歌合戦」、「赤紙と白紙」、「赤軍ゲリラと白色テロ」。なんだか物騒になってきた。「赤いのに民青」って、これは関係ないか。

話を元に戻し、これらの4原色をローマ字から覗いてみることにしよう。

4色ローマ字分解

「赤」をローマ字で書けば「aka」。古代の発音「akasi」をたどっていくと、この語は結局は「明るい(akarui)」という意味をもつことがわかる。明るくなるのは夜が「明ける(akeru)」からで、これが明るい「証(akasi)」でもある。ちなみに、垢はaqua(サンスクリット語の水)から来ているので赤とは無関係だ。

「赤」が明るいなら「黒(kuro)」は「暗い(kurai)」だろうと私は勝手に信じている。が、「赤」と「明るい」の同語源性に対して「黒」「暗い」の関連に触れている本はあまり見かけない。標語風に書けば、日が「暮れる(kureru)」と空が「黒く(kuroku)」なり、辺りは「暗く(kuraku)」なる。

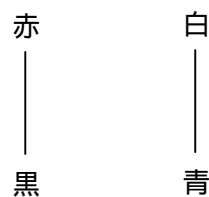


図2 4原色の通説

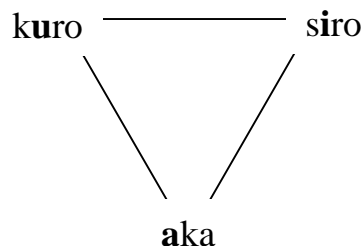


図3 原色三項対立

現代語の感覚でいうと白-黒が対立しているようだが、昔はちがったらしい。では「白(siro)」はどういう意味か。古代では「しるし(sirusi)」と読んでいたという。その意味は「著し」つまり「はっきりしている」というものである。はっきりさせることが「知る(siru)」ことだし、明確にするために「印(sirusi)」を書き「記す(sirusu)」のだろう。

いちばんわからないのが「青(awo)」だ。信号の緑色を青といたり隣の芝生が青く見えたり、この色は適用範囲が広い。「白馬」と書いて「あおうま」と読む一方、「青毛」といえば黒い馬の毛のことをいう。なんでもありという感がある。わかりやすいのはこの色を「漠」ととらえることで、これによって赤・黒が明-暗の対立、白・青が顕-漠の対立に仕立てる向きもある(図2)が、この説が正しいのかどうか私には判断できない。

むしろ私は、他の3色と比較して青には関連する動詞・名詞がない点に注目したい。青も結局は藍からきた具体名なのかもしれない。先ほど母音三角形を書いたが、ここに青以外の3色

をあてはめると aka、siro、kuro とびったり収まる。明暗、顕漠の2つの軸でとらえるのもおもしろいが、awo を除外して母音の三項対立と解釈するのも悪くはあるまい(図3)。もっとも三項対立というのは便宜的で、どちらかというところ「黒」が「暗」「漠」を兼務しているといったほうが適切である。が、私はドラマツルギーに弱いのでこのままにしておく。

ローマ字の功德

日本語の基本語彙を見ていくと、母音対立の構造がうまくできていることに驚く。

あか(aka) - くろ(kuro)

まだ(mada) - もう(mo)

ひる(hiru) - よる(yoru)

近い(tikai) - 遠い(toi)

見た(mita) - 見よう(miyo)

このように、ふだん漢字仮名交じりで書いている言葉をローマ字で書きあらわしてみると、思わぬ規則性を発見することがある。たとえば「捨てる」と「廃る」はどうだろう。漢字で書くとまったく別の単語のように思えてしまうが、ローマ字で「suteru」「sutaru」とするとその規則性に気がつくだろう。これらは他動詞・自動詞の関係にあるのだ。「分ける」「わかる」と同様の音声構造である。

日本語のローマ字化などというと、保守的な論客や文化人からは決まって日本語の美しさを台無しにするという反論が聞かれる。しかしながら、ローマ字という分析的な文字を用いてこそ気がつく美しい構造も日本語にはあるのである。私は日本語のローマ字化に賛同するつもりはないが、ワープロの入力にも使っているのだから、もう少しローマ字に親しんでもよいのではないかと思う。

参考文献

- 京都市染色試験場編(1998)『日本の色名色名の解説』第2版,京都市染色試験場.
窪園晴夫(1999)『日本語の音声』岩波書店.
小松英雄他編(1992)『例解古語辞典』第3版,三省堂.
佐竹昭廣(1955)「古代日本語に於ける色名の性格」,『國語國文』24巻6號.『日本の言語学』第5巻意味・語彙』大修館書店,1979に所収.
渡辺実(1997)『日本語史要説』岩波書店.

わたなべ しんたろう

2000年7月22日